

## 「佐々木嘉則賞」について

第二言語習得研究会会長 坂本 正

佐々木嘉則賞は、2011年1月に53才という若さで生涯を終えられた元お茶の水女子大学准教授佐々木嘉則先生の業績、ならびに、本会への貢献にちなんで創設された賞で、本ジャーナルに掲載された論文（寄稿などを除く）を授賞対象としています。本ジャーナル第14号（2012年12月刊行）に掲載された論文から授賞が始まり、今回が第7回の授賞となります。

本賞は、佐々木先生の遺作『今さら訊けない…第二言語習得再入門』（2010、凡人社）の印税を一部とするとご遺族からの寄付金を基に創設されました。佐々木賞選考委員会が選考した候補論文を幹事会が承認した後、全国大会の場で発表、表彰することになっています。寄付金相当額の20分の1を副賞に当て、寄付金がなくなった時点で賞は終了となります。

生前、佐々木先生は、本「第二言語習得研究会」の幹事、広報委員等を務め、会の発展に多大なる貢献をなさいました。本研究会のますますの発展のためにご尽力下さった佐々木先生の御遺志がこのような形で途絶えることなく生かされていくことを願っています。

### 第7回 佐々木嘉則賞の授賞について

第7回佐々木嘉則賞の受賞論文、および、選考理由は以下の通りです。

論文題目：聴解能力評価に関する研究概観

—言語評価のディレンマを克服するために—

著 者：横山紀子

選考理由：

本論文は、第二言語習得における聴解能力評価の先行研究を概観し、改めて聴解能力とは何かを考えたいうえで、大規模テストが抱える測定上の問題点を複数の視点から検討したものである。

大規模テストでは評価の妥当性、信頼性、真正性の間にディレンマが存在し、測定可能な能力や音声テキスト、タスクなどに制限を受ける。論文では、これらの課題を詳細に検討することで、聴解能力評価におけるより良い評価の在り方を模索しようとしている。また、大規模テストに欠落する評価の側面を教室評価で補完するための具体的な方法を提案している点など、教育現場へも直接寄与するものとして評価できる。

よって、本論文を第7回佐々木嘉則賞授賞論文として選考する。

## 要 旨

### 聴解能力評価に関する研究概観 —言語評価のディレンマを克服するために—

音声理解を測ることから困難度が高いとされる聴解評価を取り上げ、以下4つの観点から行われた研究を概観した。(1)評価対象である聴解能力がどう定義されているか。(2)聴解能力はどこまで測定可能か。(3)聴解評価に用いる音声テキストの妥当性はどうか。(4)聴解評価に用いるタスクの妥当性はどうか。また、言語評価には信頼性と妥当性、真正性との間にディレンマが存在することを踏まえ、研究概観を通して言語教育実践者がそのディレンマをどう克服すべきかを探った。社会的な影響の大きい大規模テストが特有の制約を受ける中で、信頼性を重視するが故に妥当性、真正性を犠牲にせざるを得ない側面があることを指摘した上で、以下の提言を行った。①大規模テストと教室評価が役割分担を担い、教室評価が対面聴解や推論解釈、自然な音声の採用、ビデオの採用等、大規模テストに欠落する側面を補完する。②評価の波及効果の研究が必要である。

### Research Review on Assessing Listening How to overcome the dilemma of language proficiency assessment

Researches on assessing listening are reviewed from the following four points of view. (1) How a listening construct is defined. (2) How far listening can be assessed. (3) How valid the listening texts are. (4) How valid the listening tasks are. This paper explores how better language teaching professionals could cope with the dilemma that language assessment suffers between reliability, validity and authenticity. Based on the research review, it is observed that high-stake large-scale tests are subject to various restrictions and are obliged to attach greater importance to reliability than to validity and authenticity. Classroom assessment should play compensatory roles and introduce interactive listening, authentic listening texts, video listening and other methods that large-scale tests tend to lack. The necessity of more research on washback effects is also discussed.